

伊丹敬之、東京理科大学 MOT 研究会編著「日本の技術経営に異議あり」

日本経済新聞 2009年11月2日刊を読む

借り物ではない独自のコンセプトを創造する

1. 2008年秋に始まった米国発の世界金融危機は、企業経営の真価を問うリトマス試験紙であった。ほとんどの企業が総崩れのなか、きちんとした業績を残している会社がどの業界にも必ず存在するようだ。たとえば、スズキ、任天堂、サウスウエスト航空、ユニクロなどだ。いずれも借り物ではない独自のコンセプトに基づく製品やサービスを提供している企業である。
2. ハイテク業界も例外ではない。DRAM、フラッシュメモリ、ハードディスクなどメモリ製品を扱うほとんどの企業が総崩れのなか、きちんとした業績を残している会社がある。サイリンクスだ。この会社の特徴は、メモリ製品を扱っているにもかかわらず、メモリとして販売していない。そこには独自の製品コンセプトがある。
3. 借り物のコンセプトではなく、独自のコンセプトを創造するためには、核となる技術が必要であるが、他の技術をすり合わせて技術同士を発酵させるとさらによりコンセプトが醸成される。ところが、技術者が自分の専門分野に閉じこもってしまうと、技術が発酵するどころか、技術も人も腐ってしまう。一方、社外の技術に安易に頼りすぎて、社内の技術と発酵させることなく、技術を蒸発させてしまっても、やはり魅力的な独自コンセプトは実現できない。
4. 借り物でない独自のコンセプトを創造するために、どのようなマネジメントが必要であるか、具体的な事例に基づいて考察してみよう。

P32 ~ 33

[コメント]

技術部門でのたこつぼからの脱却をテーマに、東京工業大学やこの東京理科大学をはじめとして MOT(Management of Technology マネジメント・オブ・テクノロジー)の専門職大学院が日本でもスタートしようとしている。その現場からの声を、伊丹先生が手際よくまとめた本書は参考になる。

- 2009年11月9日林明夫記 -